関西自然保護機構会誌 29（1）：65－66, 2007

春日山におけるニホンジカ（*Cervus nippon*）による イズセンリョウ（*Maesa japonica*）の採食

奈良教育大学 鳥 居 春 己
奈良教育大学 高 野 彩 子

Feeding *Maesa japonica* by the sika deer, *Cervus nippon*, in Mt. Kasuga. Harumi Torii and Ayako Takano（*Nara University of Education*）

春日山におけるニホンジカ（*Cervus nippon* 以後，シカと呼ぶ）の採食による影響は多くの樹種で確認され（前迫，2006），春日山を含み広く奈良公園一帯ではナンキンハゼ（*Sapium sebiferum*）やナギ（*Podocarpus nagi*）などシカの不嗜好性植物が繁茂するという状況を随所で見ることができる。前迫・鳥居（2000）は春日山におけるシカによる剥皮状況を報告している。しかし，それはシカと植物の長い関係の一断面を示されたに過ぎないと考える。現在，採食されずにいる種であっても，状況が変わり，採食されないとは言い切れない。飛火野ではいつのまにかイラクサ（*Uritica thunbergiana*）を見なくなってしまった。不嗜好性植物と見られていた種が採食されるようになる時のシカの棲息密度は，シカを含めた地域の保護管理に重要な情報と考える。

奈良公園や春日山におけるイズセンリョウのシカによる採食は５～６年前から確認され，前迫（2001）は採食された個体では樹高が低くなっていることを報告した。しかし，最近になり春日山においてイズセンリョウ（*Maesa japonica*）が激しくシカに採食され，再生産への影響を示唆することが確認されたので報告する。

それは春日山山林内の妙見宮付近で確認された。そこは前迫（2001）が報告した採食地の南約500ｍの地点に2004～2005年に設置されたシカ柵の外である。2005年当時柵内外ともに1.3ｍの樹高に達していた（胸高直径の計測が可能）すべての個体を計測したが，その際にはシカによる採食・剥皮状況も調べており，柵内外ともにイズセンリョウに採食痕跡は見られなかった。いつ頃から採食され始めたか正確には把握できていないが，2007年２月に集中的に採食されていることを確認した。

そこで，2007年４月に柵内外ともにイズセンリョウの樹高を計測し，食痕の有無を記録した。樹高と本数，痕跡の有無を図－１に示した。柵内の面

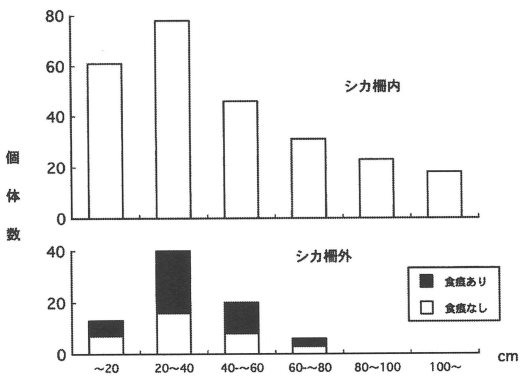


図１．イズセンリョウの樹高とシカの食痕．



図2．イズセンリョウに残るシカの食痕（矢印）．

積が若干広いが，単位面積当たりの個体数は明らかに柵内が多く，かつ稚樹が多いことがわかる。また，樹高の高い個体が柵外で少なく，樹高が低くなり，柵外の個体の57.5%に食痕が残されていた。

柵内の平均樹高は45.8±31.0cm（平均±標準偏差　以後同様に示す），柵外の食痕のない個体は32.6±16.4cm，食痕の残る個体は38.2±15.5cmであった。柵内は多くの稚樹が生長しているため，個体による樹高の変異が大きい。また，柵外ではイズセンリョウの57.5%に食痕が残り，稚樹の少ないことは再生産に影響が出ていると考えて良いのだろう。

いずれにせよシカ柵が本来はシカの嗜好性植物と考えられる植物の保全に有効と考えられるが，柵内で稚樹が育ち，不嗜好性植物の保全ともなっていることは皮肉なことかもしれない。なお，春日山のシカ密度は20〜30頭／㎢と推定されている（鳥居他，2007）。

なお，本報告では同じ株から立ち上がっている枝すべてを1個体と扱っている。

引用文献

前迫ゆり・鳥居春己．2000．特別天然記念物春日山原始林におけるニホンジカ *Cervus nippon* の樹皮剥ぎ．関西自然保護機構会誌，22（1）：3－11.

前迫ゆり．2001．奈良公園および春日山原始林におけるシカの採食に対する変化．Nara Botany，23：21－25.

――．2006．春日山原始林とニホンジカ－未来に地域固有の自然生態系を残すことができるか－．「世界遺産をシカが喰う－シカと森の生態学」．（湯本貴和・松田裕之編），147－165．文一総合出版，東京.

鳥居春己・高野彩子・景山真穂子・原澤牧子．2007．奈良公園春日山原始林におけるニホンジカ密度推定の試み．関西自然保護機構会誌，28（2）：193－200.